

---

# 魔眼のリンネ!!

勇者マスオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔眼のリンネ！！

### 【Nコード】

N3123T

### 【作者名】

勇者マスオ

### 【あらすじ】

死に損なった少年が『直死の魔眼』を持って武偵として頑張る。そんなおはなし。

## どこかで見た光景 See | again

俺こと、咲木 鈴音（さかき・りんね）を一言で表すのならば、モブキャラだ。それも酷く場違いな。

ポケモンで言えばコラッタ、ガンダムで例えたらガンタンク。どう頑張っても主人公の経験値稼ぎになるのが精々の、大安売りのワゴンセールで売り出されている、ありふれたその他大勢、永遠の日陰者。

このまま順当に人生を行けば普通に学校に通って普通に就職して、普通に死ぬ。なんの障害もない平坦な道のり。

そんな生涯を送ると俺は思っていた。いや、違うな、今でもそう思ってる。

家族と暮らして、恋人を作って、結婚して。そんなありふれた幸せがあるそんな人生を。

あの日までは。

俺の記憶の始まりは病院の真っ白な天井からだった。その以前の事は何一つ覚えていない。

交通事故。

たった漢字四文字で表されるこの事象が俺にとっての一番初めの記憶。家族もそれ以前の記憶も根こそぎ持っていかれ、強制的にリセットをかけさせられた。俺の根源、咲木鈴音の原初。ただの一般人だった俺がなんの因果か、シャーロック・ホームズ、アルサーヌ・リュパン一世、卑弥呼、遠山の金さん、ジャンヌ・ダルクといった歴史上の偉人の末裔が華々しく活躍するステージに迷い込むことになったきっかけ。

同時にそれは咲木鈴音を語る上で最も重要で最も救われた「勇者」との出会いでもあったのだ。

万物には全てに綻びがある。一から作り直されたいという願望。俺の視界に映る綻びをあの人は死の線と呼び。俺の眼を『直視の魔眼』とそう呼んだ

あの人と出会ったのは目を覚まして間もない頃だった。まだこの眼のことを何も知らなかった俺は視界に入っておぞましい黒い線に怯え、全身を震わせながらひたすら線が見えない場所へと無我夢中で走り続けていた。

走って走って走って。

息を切らし、たどり着いた場所は、小高い丘の草原。

「ッ！！」

目覚めてから初めての全力疾走はさすがに無理があったらしい。全身の力が抜けるように前にのめり込むように倒れる。ほすん、と自分が倒れ込んだその音の軽さに思わず苦笑い。

疲れでそこはかたなく気だるい身体を動かして仰向けに寝転がる。

目の前に広がるすいこまれそうな蒼い空にはあの線はない。

その光景に心の底から安堵した。

もしも空まであんなものが見えたら堪らない。

誰にも見えない俺にだけ見える黒い線。

その線に触れるとあらゆるものを例外なく解体することができるソレは地面や壁、花瓶あげく人間にも描かれて、否応なく自分のいる世界が脆いかを思い知らされた。

ゆっくりと自分の右手を前に突き出す。やっぱり黒い線は消えてはくれない。

「こんなツギハギの世界を見る位だったら………」  
俺は

人差し指と中指を立て、忌々しい眼にむかって突きだそうとして、

「がふうっ!？」

「あ、わり」

いきなり、頭を蹴飛ばされた。

「いやー、スマンスマン。俺の不注意だったわ」

たははー、とたいして悪びれた様子もなく痛みで悶絶している俺の横にしゃがみこんで笑う男。

白いワイシャツに黒のスラックスといったこの上ないくらいにシンプルな服装のソイツはどこにでもいるような近所の気のいいお兄さんといった感じだった。

あまりにも軽い謝罪に腹の底から、ムカムカと怒りがこみ上げ、そのふざけた笑い顔に穴よ開けとばかり睨みつける。

「痛っ」

しかし、その顔に浮かぶ黒い線が視界に入った途端、鈍器で頭を殴られたような鈍い痛み思わず呻いた。

そんな俺の様子を見ていた男はこっちの眼を見みるやいなやさっきのバカ笑いが嘘のように消え、まるで明かりのスイッチを消したように色のない表情が浮べる。

「おい、ガキンチヨ。お前一体『何』が見えている……………?」

低く重い声が耳に届く。

俺はその言葉に思わず眼を見開いた。その言葉はまるで

「アンタ、誰？」

気がつくと、そんな言葉が俺の口から零れ落ちる。

「俺か？ 俺はただの旅人だよ。元勇者のな」

そう言ったあの人は優しく笑って俺の頭を撫でてくれた。

それがあの人とのファーストコンタクト。

短い間だったけれど、誰も信じてくれなかった眼とどうつきあえばいいか教えてくれた。

あの日。

あの丘で。

狂ってしまいそうな世界で起こったその出会い（奇跡）はたぶん地獄の底に落ちたって忘れはしない。

だって、何もかもなくして空っぽだった俺に大切なものを入れてくれた、たった一人の恩人なのだから

## とある武偵の少年 A | b o y

東京武偵高校。

レインボーブリッジの南に浮かぶ南北およそ二キロ・東西五〇〇メートルの長方形の人工浮島<sup>×ガフロート</sup>の上にある学校。

学園島とあだ名されたこの人工浮島は『武偵』を育成する総合教育機関である。

武偵とは凶悪化する犯罪に対抗して新設された国家資格で、武偵免許を持つものは武装を許可され逮捕権を有するなど、警察に準ずる活動ができる。

ただし警察との違いは金で動くことで、金さえ貰えれば、武偵法の許す範囲ならどんな荒っぽい仕事でも下らない仕事でもこなす。ぶっちゃけて言えば『便利屋』だ。

この東京武偵高では、通常の一般科目に加えて、その名の通り武偵の活動に関わる専門科目を履修できる。

分類すれば全部で十四種あり、その内訳は百人に三人弱は生きて卒業出来ない『明日なき学科』<sup>アサルト</sup> 強襲科から胡散臭さ百パーセントの超能力捜査研究科（SSR）まるで一体どこのRPGだと突っ込みたくなるラインナップである。

ちなみに咲木鈴音は探偵科。<sup>インケスタ</sup>古式ゆかしい推理学や諸々の探偵術を学ぶ、『武偵の良心』と呼ばれていたりする学科だ。

そんなマンガやアニメで出てくるような学科が存在する中で日々を戦い続ける学生戦士である鈴音が学生寮に存在する自身の部屋の扉を開けての一言と言えは……………、

「俺の部屋はどこ行った？」

武偵高らしいネジの一本も二本もぶつとんだ光景に対してのなんとも哀愁漂う呟きだった。

壁の至る所に弾痕や斬撃の跡ができ、リビングにある家具という家具が軒並み破壊、爆散され破片となって床に散らばっている。

その戦場跡地のような風景の中心地で髪の毛はバサバサ、服は乱れに乱れ、汗やホコリにまみれてこの惨劇の原因である二人の美少女がなんと女としてどうなのよ？ と聞きたくなるようなカッコで力尽きていた。

「はぁ……………はぁ……………なんて……………しびとい、どろ、ぼっ、ネ……………」

そんな昼ドラでしか聞かないようなセリフを吐き、日本刀を杖のようにながらなんと立っている少女は星伽白雪<sup>ほよせしろうき</sup>。名は体を表すといった白い肌をもち、つやつやした黒髪の前は綺麗に切りそろえられている。普段はおっとりとして優しい目つきをしているが現在は親の敵を見るような感じで瞳孔がガン開きになっていた。

あんまりにも形相がアレだったので思わず顔を逸らした鈴音だったが、その視線の先にあった日本刀に現在進行形で串刺しにされているお気に入りのゲーム機がご臨終なさってるのを見て思わず目頭を抑えてしまう。

「あ、あんたこそ……ととと、くたばりなさいよ……はふ、はふ……」

片やいかにも疲労困憊といった感じで傷だらけの床に尻をつき両膝を立て、上体が後ろに倒れるのを支えているのは神崎・H・アリア。

髪の毛は長く、ピンクのツインテールにし瞳の色もピンクに近い赤まるでどっかの人形のようにかわいらしい少女だが、残念ながら身長は百四〇ぐらいいがなく、胸も悲しいくらいにまな板だった。どうがんばっても中学生にしか見えない。

しかしながらこんなナリしても欧州ではブイブイ言わしてたようで『双剣双銃』（カドラ）の二つ名をもつ凄腕武偵らしい。らしい、と言つのも鈴音にとってはこの少し前に起きた『武偵殺し』の事件で転がりこんだときに、もう一人の部屋の主と散々に振り回されてきたのでめんどくさいただのガキンチョという分類分け（カテゴライズ）されていたりするのだが。

「あーあ……」

口から魂的な何かを出す勢いで脱力した鈴音はこのまま現実逃避を続けるわけにもいかず、とりあえず二人の残念美少女の横を通り過ぎてついでにアリアの体を支えていた腕を蹴飛ばして転ばした。後ろでギヤーギヤー言ってるがこの位の仕打ちはしていいはずだと信じもしない神に許可をとった鈴音はそのままベランダに向かいベランダにでん、と置いてある防弾製の物置の前に立つ。

ガラガラ、となんと頭の上の悪そうな建て付けの悪い扉を開けると、

「……………ん？ もう終わったのか？」

けして広くない物置の端の方で小さくなってケータイを眺めていた男が鈴音の顔を見上げると、災害救助された人のような安堵の色をそれなりに整った顔にうかべた。

この男子生徒の名前は遠山キンジ。

鈴音のルームメイトにしてアリアの奴隷兼白雪のご主人様となんと複雑なポジションに置かれた一年から付き合いのある友人である。

端から見ると二人も美少女侍らすという世界中のモテない男子生徒を敵に回したような状況なのだが残念ながらその中心にいるキンジはある体質のため極度の女嫌いだったりする。

『ヒステリア・モード』。

正式名称『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』。

神経性の遺伝体質らしくこの状態に入ると遠山キンジという男は思考能力、判断力、反射神経などが格段に増大し、超人的な能力を発揮するのだ。

しかし、残念ながらこの力は万能ではなく発動条件が存在する。

それは『性的に興奮すること』。

まあ身も蓋もない言い方をすればムラムラするとすごいことができずますよー、ということだ。

しかも、発動中はお前一体どこのホストだ、という感じのジゴロキヤラになってしまうため後で素に戻った時に自分自身の言動に悶絶したりするの鈴音は結構見たりする。

ちなみに鈴音が偶然この話をキンジに聞いたときの感想でリアル変態紳士じゃん、とうっかり口を滑らしてしまい鋭い右ストレートでぶっ飛ばされたのはいい思い出、とは本人の弁。

「ああ。たつた今停戦協定が締結された。だからでてこい」  
非常に面倒くさいそうに鼻をポリポリ掻きながら鈴音はキンジに部屋の内部がみえるように体を横にずらす。

「ああ……………っ！！ 俺のお気に入りの家具たちが……………」

がっくりと四肢をつき泣きそうになったキンジの姿はさながら倒産した会社の社長のようだった。

「キンちゃんさまっ！」

キンジの呟きに気づいたらしい白雪は刀をがしゃんと脇に置き、よろよると敗残兵のごとく近寄ってキンジと鈴音の前に正座した。そして黒曜石みたいな瞳をうるうるっと潤ませ、両手で顔をおおう。

「しっ、死んでお詫びしますっ、きっ、キンちゃんさまが、私を捨てるんなら、アリアを殺して、わ、私も今ここで切腹して、お詫びしますっ！」

重い。

キンジと鈴音はドン引きしたのはいたしかないだろう。

一体何したんだテメー、といった視線を鈴音はキンジにむけるが、  
当の本人はいつの間にか幼なじみの命を握らされる、という希有な  
状況に完全に思考処理速度が落ちていた。

「あ、あのなー…………捨てるとか拾うとか、なに言ってるんだ」

完全に棒読みだし顔も引きっているがこれが現在キンジが出来る全  
力解答だった。

「だって、だって、ハムスターもカゴの中にオスとメスを入れてお  
くと、自然に増えちゃうんだよおー！」

ぶわつと目から涙を溢れさせる白雪だが、どうやらキンジの節操の  
無さはハムスターレベルらしい。その認識を叩きつけられたキンジ  
はなんともいえない顔でイラついた声を出す。

「意味が分からん上に飛躍しすぎだっ」

しかしながら完全自閉モードの白雪はそんな声はなんのその。自ら  
の妄想の迷路爆走し、勢いよくキンジの襟首にしがみついた。

「あ、あ、アリアはキンちゃんのこと、遊びのつもりだよ！ 絶対  
そうだよー！」

さらにぐわんぐわん、上下運動を追加されたことにより、カエルが潰れた声をキンジはあげるが当然のごとくスルー！。

「私が悪いの、私に勇気がなかったからキンちゃんは外にっというか内に女を……………」

「それ以上勇敢になられても困るわよ」

鈴音の後ろから憎まれ口を叩いたアリアにギギンツと苛烈な視線を投げつけたあと、

「キ、キンちゃんと恋仲になったからっていい気になるなこの毒婦  
！」

白雪は完全に落ちて白目剥いてるキンジをゴミのようにべしっ！！と放り投げると、袖口から仕込んでいた鎖鎌をアリアめがけてブン投げた。

さて、ここで問題が一つ。

アリアの立ち位置は鈴音の後ろ。そして鈴音の目の前には白雪が立っているのだ。

つまり何が言いたいかと言つと。

「うおおおおおいつつ!!」

白雪の射線上にいる鈴音はブオツツ!! と、物凄い勢いで飛んできた鎖鎌に危うく丸刈りにされそうになりどんもりうつて伏せ、顎を強打した。

「こ、恋仲!？」

地面に倒れ伏す男共をよそに大変勇ましくアリアは盾にした漆黒のガバメントに絡まった鎖を白雪と二人で引っ張り合う。

「ば、バカ言うんじゃないわよ! あ、あああたしは、恋愛なんか、どうでもいい!!」

ラブ関係の話題がニガテなアリアは小学生レベルの低い返しを真っ赤になって絶叫する。

「恋愛なんか あ、あんな時間のムダ、したこともないし、するつもりもない! あ、憧れたことだってないんだから! 憧れたこともない! 憧れたりしない!」

なんかもう、必死すぎてこっちが涙出てきそうだな、と床と熱烈なディープキスを交わす鈴音はそのまま武偵らしくそろそろと這って進む。

(こんな状況で武偵校スキルが役にたつても全然嬉しくねえ……)

そんなことを考えながら戦死仲間のもとへたどり着く。

「……おい。生きてるかー？」

ツンツン、と向こうに気づかれないように細心の注意を払いながらキンジをつつく鈴音。

「……つつくな。生きてるよ」

どつやら復活の呪文は必要ないらしい。力の抜けた弱々しい声が耳を撫でる。

「ど、どーする？ これ」

「どつするも何も止めなきゃ不味いだろ」

鈴音の問い掛けに嫌々答える。

そりゃあ、出来るなら放置しておきたいが、このままいくと住む家が文字通り消滅してしまいそうだった。二人共ホームレス生活ルートなんてまっぴらなのである。

さあ、そろそろ止めに入ろうか、と不死鳥のごとく二人して腕に力を込めた時に、

「キンジはあたしのドレイ！ ドレイに過ぎないわ！」

なーんてアリアの言葉が二人の耳に突き刺さり、そろそろと腕の力を抜いて不死鳥達は再び元のポジションに舞い戻った。誰だって死にたくはない。命をだいじに、だ。

「どっ、どっ、ドレイ………！？」

それを聞いた白雪は顔面蒼白になって、あんぐりと口を開けるが、思春期特有の逞しい妄想力は凄まじいらしく、今度は火のついたように真っ赤になる。

「そ、そんな………イケナイ遊びまで、キンちゃんにさせるなんて  
「！」

「な、ななな、なにバカなことやってんのよ！ 違うわよ！」

「ちがわない！ わ、私だってその逆のは頭の中で考えたことがあるから分かるもん！」

自分の発言によって墓穴を掘ったアリアと自らの欲望垂れ流しの白雪。

第三者（鈴音達）にとって至極どーでもいいケンカはこれ以上ないほどに混沌としていた。

「ちがうちがうちがうちが  
キンジ！」

わざわざ銃使わなくても風穴開くんじゃないだろうか？ といったアリアの視線を受けたキンジは倒れたまま、ビクウ！！ と体を震わす。

「な、なんでございましょうか？」

「このおかしい女が湧いたのは、一〇〇パーセントあなたのせいよ！ 何とかしない！ そうしなきゃ後悔させてやるんだから！」

もうすでに後悔に関するメーターは完全に振り切って無我の境地に

入ってるキンジはハアとため息をついき億劫そうに体を起こした。

「……………えーっとだな。おい……………まず白雪」

「はいっ」

キンジに呼ばれた白雪は鎖鎌をぱつと話してキンジに方へ向かって正座をする。

どてっ、と反動でアリアが両足を真上にあげてひっくり返えったがそこまでは流石にキンジにも面倒は見きれないらしい。

今のアリアを見なかったことにしたキンジは白雪に優しく、慎重に語りかける。

「よく聞け。俺とアリアは武偵同士、一時的にパーティーを組んでいるにすぎないんだ」

「……………そうなの？」

「そつだぞ白雪。お前、俺のあだ名知ってるだろう？ 言ってみろ」

「……………女嫌い」

「だろ」

「あと、昼行灯」

「それは今関係ない」

「は、はい」

そこでキンジは一息ついた後、ズイ、とアリアを指差す。

「とうわけでお前のそのよく分からない怒りは誤解であり無意味なんだ。だいたい俺がこんな小学生みたいなチビと「風穴」そんな仲になったりするわけないだろう？」

途中アリアのインターセプトしてきたが強引にキンジは押し通す。

「で、でも……キンちゃん」

「ん？ なんだ？」

キンジは普段は従順な白雪の珍しい反応に眉の端をあげる。

「それ……」

と、白雪はその白魚のような指をブルブル振るわせながらキンジのポケットを指す。

その先をつい、と辿ってみるとそこには『なんのつもりでそのデザインなの?』といった疑問が尽きない謎のマスコット『レオポン』のストラップがひょっこりと顔を出していた。

そのままつつつ……と、白雪の指は、起きてたアリアのスカート  
のポケットを指した先にはレオポンが『やあ』という感じに頭と手  
を出していた。

それを指し終わった瞬間、

「パールツクしてるうつつ　　!!」

「ええええええ　　!?!」

叫び号泣する白雪が叫んだ昭和ムード漂うその死語は今まで静観していた鈴音のツッコミ魂に火をつけるのには充分な火種だった。

「いやいやいや!　　パールツクって星伽!　　今時はバカッブルで

もしねえーよッッ!!」

「で、でも、咲木君。ペアルックは好きな人同士ですることだよね!? 私、私、何度も夢見てたのに!」

するつもりだったんかい、と思わず鈴音が白雪の頭を叩いたのは不可抗力である。

「だーからー! あたしとキンジはそういうんじゃないのよ! こんなヤツとなんて、一ピコグラムもそっという関係じゃない!」

「ひどい言われようだ」

アリアの容赦ない口撃にキンジは肩を落としたが、すぐに気分を切り替え未だ錯乱してる白雪の両肩を掴んで目を覗き込む。

「お前、俺の言うことが信用できないのか」

ここの場面だけ切り抜いて見ると浮気した夫が妻に言い訳してる状況になってることにキンジは気づいていない。

「そ、そんなじゃないよ。信じてる。信じてますっ……………」

そしてボロボロと泣きながら必死にすがりつく白雪を見ればますますキンジが浮気性のダメな夫にみえてくるのは気のせいだろうか？と鈴音は首を傾けた。

「じゃあ、じゃあ、キンちゃんとアリアは、そういうことはしてないのね？」

と、白雪がキンジとアリアを見回して少しだけ落ち着いた声で問いただしてくる。

「そういうことって、例えば？」

鈴音は近くに転がってたへしゃげたペットボトルを拾い上げのキヤップを開けながら聞いてみた。

「た、例えばキ、キス、とか……」

ぼそりと、小さな声で呟いた白雪の声は強烈な効果をもたらしたらしい。

キンジとアリアは顔を見合わせ、石化の呪文でも唱えられたかのように固まった。

特にアリアの表情は赤信号みたいに真っ赤になって口をパクパクと魚のように開けたり閉じたりしていた。

どうやらこの二人やらかしようである。

「……………た……………の……………ね……………」

一方、大当たりを引いてしまった白雪はだんだんと瞳孔がっぴらいてすっかり戦闘モード。

その顔から脱色したようにみるみる内に表情を失い、喉の奥からは、ふふ、ふふふ、うふふふと虚ろな笑い声まで聞こえてきた。

「そ、そ　　そういうことは、したけど!」

弱点（恋バナ）を攻撃されて訳が分からなくなったのだろう、アリアは突然立ち上がってその背中だか胸だか分からない部分を思いつきり張って、

「で、でも、だ、だ、だ、大丈夫だったのよ!」

何が？　と一同の頭にハテナマークが浮かぶ。

「昨日わかつたんだけど！こ、ここ、こ」そこでアリアは息を思いつきやすいこんで「子供はできなかつたから！！」

大声でそんなトチ狂ったことをどや顔でアリアは叫んだ。

全員、余りの的外れな発言に指一つ動かすことが出来なかつたのは仕方ないことだろう。

鈴音の脳内ではアリアにツッコミたい数々のワードが幼稚園の児童並みのわんぱくさで駆け巡つたのだが……………、

「もう、いいや」

最終的に全部遠いどこかにブン投げた。

さあー明日に備えて寝るかー、と鈴音は肩をコキコキ鳴らし寝室に向かう。

その後ろで「子供の作り方教えなさいよっ！！」とか「教えるかこのバカ！……………」っておいどこ行くんだよ鈴音！！」といった声が背後から掛けられてくるが、その声に対して振り向きもせずには返答したのはたった一言、シンプルな言葉だった。

「子供は「ウソ」が運んでくんだよ」

## 騒がしい日々始まり The Mission

アリアと白雪の今後幾度か繰り返されることとなる室内大戦争の記念すべき第一回から数日後の朝。

まだ朝日が拳がって間もない頃に鈴音は目を覚ました。

「んー……………ふう」

大きく伸びをして体を解しながら二段ベッドの上段からハシゴを使って降りる。

まだ起きるにはまだ早いようでキンジとアリアの二人は仲良くイビキをかきながら夢の中へダイブ中。だが時々聞こえる寝言からはアリアのほうは「……………うふうふう。ももまんがたくさん……………うふう」と幸せそうなのに対しキンジは「……………やめる、アリア……………それだけは壊さないでくれ……………」と額にシワを寄せながらうなされている。なんとも今の二人の関係を良く表した仕様になっていた。

「……………そういや、アリアと同じ寝室で寝るって問題あるんじゃないの？」

ポツリと今更なことを呟く鈴音。

いくら寝室が共通でここしかないにしても無防備すぎやしないか？  
とへソまるだしで「……うへへ」とポリポリ腹をかいてるチビっ  
子を横目で眺める。

こちらら、青春真っ盛りの学生なのだ。同じ屋根の下で男女が寝食  
を共にするというのは学校側から見ても些か問題がある。まあ、武  
偵校は一般的な学校とは一歩も二歩もおかしな所なので、ああ、い  
んじゃない？ と放置される可能性もなきにしもあらずだが。

とそこまで思考して、

(そりゃあ、ないな)

ふつと幼児体型のエリアの身体を思い出してその考えを棄却する。  
幾ら若さを持って余し気味の年代である鈴音達であったが、いくらな  
んでもあの体型にほだされるのはイカンだろう。将来が凄く心配に  
なってくることうけあいだ。

(……………あれ？ でも、キンジのやつがエリアに目えつけられた  
のってアイツの前でヒステリア・モードになったらしいけどなあ…  
……………????)

そこまで考えて不意に背筋がスツと冷えてくる感触に鈴音はビクッ  
！と震え、反射的に二の腕を擦る。

「まさか、な」

なんだか気づいてはいけないものを察知たような気がした鈴音はそそくさと寢室を後にする。

恐らく残りの住人がこの事を知ったら地獄の鬼より恐ろしい顔で鈴音の全身は風通しが良くなっていただろうが、幸いな事に鬼達は就寝中。まさしく、鬼のいぬまになんとやらだった。

顔を洗うために洗面所へ向かった鈴音は正面の鏡に写る自分の姿を眺める。

別段美形というわけではなく、かといって強烈にブサイクでもない。中間を地でいってる自身の顔を見て鈴音が心底思ったのはただ一つ。

「……………彼女がほしい」

割と真剣な願望だった。

そりゃあ、やり方はアレだったがキンジは美少女二人が取り合いになったのだ。そんなことされりゃあこっちは舌打ちの二つや二つしたくなるのは当然だろう。

キュ、と軽く蛇口を捻り、寝ぼけた頭をシャキッとさせるため、刺すように冷たい水を顔に掛け、丁寧にタオルで拭くために上体を起こした瞬間、

「　　ツツ！！」

そこで世界は一変した。

線、線、線、線。

至る所に無尽蔵に描かれる黒い線。

「……………ク……………ッソ……………ッッ！！」

いきなり視界に飛び込む暴力的な死の情報に鈴音は脳を直接手で撫で回されてるような不快感が襲ってくるのを感じて思わず右手で自分の頭を鷲掴みにする。

この『眼』を手に入れてから鈴音が特に力を入れたのはその制御だった。

万物の死が見える『直死の魔眼』。

死が見えるというのはすなわち死を忘れないことと同意義である。

一時の休息もなく、ただただ残酷に無慈悲なまでに思い知らされる。

全てのありとあらゆる物は絶対に死ぬというのを。

それは、一体どれほどの地獄なのだろうか。

誰も知り得ることは出来ない鈴音だけが知覚する死の世界。

だからこそ、当時の鈴音は一切食事をとらず血反吐がでるまで努力し続け、ようやくONとOFFを切り替えることに成功する。

こんな地獄（場所）にはいたくない、その一心で。

しかし、残念ながらこの『眼』は鈴音の一部だ。いくらON、OFF切り替えが出来るとしてもそれは完全ではない。メガネを付けはずしするのはワケが違う。

なので時々、精神が緩むとタガが外れ不意にスイッチが入ってしまったことがあるのだ。

(……………この頃は起きなかつたからといって気を抜き過ぎちま

つたな……………)

鏡に写る黒から神性を表す深い青に変わった両目を見て顔を苛立ちで歪める鈴音。

「……………は…ズ……………ッッ!!」

パキリ、と世界が割れる音が聞こる。

鈴音の身体は力が抜け、前にのめり込むように倒れようとしたが、

「おい！ 鈴音。大丈夫か!？」

誰かに右腕を引き上げるように掴まれた。鈴音はのろのろとした動きで焦りの滲んだ声の方に視線を向ける。

「 なんだ、キンジか」

「なんだじゃねえよ。お前大丈夫か、って聞いてんだよ」

思ったよりも呑気な返答に拍子抜けしたのかキンジは呆れた表情を顔を浮かべた。

「ああ、悪い。ちょっと立ちくらみしちゃったみたいだ」

悪りいサンキューな、と苦笑いしながら自分の足でしっかりと立つ。

鏡み越しに見る鈴音の眼はいつも通りの黒い瞳だった。

「アドシアド？」

朝食である沢庵をコリコリとかじりながら鈴音は向かいで味噌汁を飲むキンジを見る。アリアの方はまだ寝てるらしい。

「ああ、お前なんかするのかな、と思ったんだが」

アドシアドとは年に一度、行われる祭典で狙撃科なら狙撃競技、スナイプアサルトスナイピングガンシューティング強襲科なら拳銃射撃競技と言った武偵としての技術をその科の代表が競いあう。

勿論、代表に選ばれるのは非常に困難ではあるがその代わり競技でメダルを得れば進路に困らないといった特典が得られる、言っなればスポーツでのオリンピックである。

「特にねーな、というか俺が代表に選ばれるとかあり得ねーし」

「じゃあさ、俺と不知火と武藤でバンドやるんだけど、お前もやらないか？ どうせ運営は必ず手伝わないとイケないし」

いつも一緒につるんでる、『強襲科の歩く爽やか美男子』不知火亮しらぬいりょうと乗り物大好きバカの武藤剛気たけむらつよしの二人とキンジと鈴音を含む四人でやるバンドとは、最終日、一番最後のフィナーレを飾る出し物でアルカと呼ばれるナイフや拳銃による演武を女子がチアリーディング風のダンスと組み合わせるパレードする行事でのバック演奏の事だ。

そんなキンジの『バンドやるぞ』の誘いを聞いた鈴音は一つ思ったことを確認してみる。

「でもさ、お前いいワケ？ そんなモンにでちまっても」

鈴音がニヤニヤしながら聞いたその言葉にキンジは一瞬で心底嫌そうな顔になった。

「げっ、そうだった……………。すっかり失念してた」

「お前、ヒステリア・モードになりなくないか言ってるくせにガードが障子紙以下だな」

実はこの出し物、世間の印象がイマイチ良くない『武偵』の仕事のイメージアップを主な目的に定めたモノだったりする。

なので見た目が大変重要なのだ。つまり何が言いたいのかと言うと、チアーガールを担当する女子達の衣装は大変エロ………もとい、セクシーなモノであり、キンジにとっては地雷原を全裸で突っ切るぐらいに愚かしい行為なのである。

すっかり元気を無くしてしまったキンジは一通りバカにした笑いを続ける鈴音に眉をピクピクさせて何か言い返そうとするが、今回は完全な自爆。ぐうの音も出なかった。

「はあ、………もういい。先にいくわ」

ため息をつきながら手早く食器を片付けにキッチンへむかうキンジの後ろ姿に鈴音は目の端に溜まった涙を拭い、笑いの余韻を残しながら疑問を投げかける。

「あー、笑った、笑った。それにしても今日は早いな、なんか用事でもあんのか？」

「おーう、笑え笑え。ついでに俺の憂鬱も笑い飛ばしてくれ………」  
「……」そこでキンジは力なく笑い「今日から朝練だよ。なんでもアリア曰わく『ドレイの調教』らしいけどな。………一体何をする

んだか」

じゃあな、と右手を上げキンジは力なく肩を落とし出ていった。

その煤けた背中を見て鈴音はポツリと、

「……………苦労してんな、アイツ」

とのたまい、海苔をまいた白米を口に放り込んだ。

「げえ……………」

放課後、掲示板を前にした鈴音は張り出された張り紙をみて苦虫を十匹まとめて噛み潰したような顔をした。

『生徒呼出 二年A組 探偵科 咲木鈴音』

鈴音はもう一度その紙面に事務的に書かれた文字を眺めたあと目をゴシゴシと乱暴にこするが、『夢じゃないからさっさとこい』みたいな感じに印字されてる文章には一寸の間違ひもない。

まがつ事なき教務科からのラヴコールでした。本当にありがとうございます。

そんなテロップが大変腹が立つ絵文字付きで脳裏をよぎる。

教務科は一言で表すと魔窟だ。

ここ、東京武偵校は危険という文字を詰めるだけ詰め込んだ物騒極まりない所だが、そのなかでも『三大危険地域』と呼ばれる絶対に  
関わりたくない場所が存在する。

通称『死ね死ね団』アサルト強襲科。

皆さんの管理でいつ火薬が誤爆するかわからないことで有名な地下ジャン  
倉庫。クシヨク

そして『魔窟』マスターズ教務科。

なぜ、教師の詰め所にすぎない教務科が危険なのか？

答えは至ってシンプル。

武偵高の教師が揃いも揃って超一級品の危険人物ばかりだからだ。

まあ、少し考えれば誰にでも解ることである。人様の部屋で銃撃戦やらかすような生徒がいるのだ、教える側の教師がまともだとして考えられようか。

鈴音が知ってる中でも、前職が各国の特殊部隊、傭兵、マフィア、果ては殺し屋まで……これだけいりゃあ小国なら落とせるじゃね？ といいたくなるような経歴の持ち主が大集合している。

そんな魑魅魍魎が大手を振ってまかり通ってる所に誰が好き好んでいくものか。

(……………いつそのことバツクレちまうか？ いや、でもなー、そうすつと後が怖えーんだよな)

へたしたら強襲科をけしかけてボコボコにタコ殴りにしてから連行されるかもしれない、とリアルにありそうな想像に頭を抱えて唸っていた鈴音は隣に同じような張り紙が張り出されているのに気がついた。

『生徒呼出 二年B組 超能力捜査研究科 星伽白雪』

「……………珍しいな、星伽が呼ばれるなんて」

白雪は優等生である。

偏差値は鈴音にとって驚異の75、生徒会長であり園芸部部长で手芸部部长で女子バレー部部长でもあるといった、最早どうやってロケーション組んで回してるのか気になるほどの部長の中の部長、部長番長として名を馳せ、キンジ絡み以外では完璧な模範生である白雪の呼び出しに鈴音は僅かに首を捻る。

もしかして昨日の騒ぎの事か？　とも考えられたが残念ながらここは天下御免の東京武偵高。そんなもの日常茶飯事であった。

「……………まあ、とりあえず。うだうだ考えて遅刻したら殺されそーだし。諦めてちゃっっちゃと行くか」

左手を腰に差した日本刀に乗せてコツコツと廊下を踏みしめる音を響かせる。

周りに人一人いないこの状況下ではこの長い廊下が死刑場へと続く道に思えてくきた鈴音の背中にはちよつとだけ冷や汗が流れた。

一階廊下の突き当たり、そこが人外魔境の地、教務科である。

もう既に扉からはおどろおどろしい障気が滲み出ているが鈴音は気のせいだと自身に言い聞かせた。

一度肺の中の空気を入れ換えるために深呼吸をした鈴音はノックをし、

「……失礼します」

非常に重たく感じるドアを開け放つ。

「おーいこつちだア、咲木いー……………」

キョロキョロとせわしなく当たりを見回した鈴音が声のした方へ向くと机の向こうからにゅ、と手が生えてきて力なくこちらへ手招きしていた。

その様子が完全に死体が手を振っている様に見えた鈴音は盛大に顔をひきつらせつつ手招きしている机へ足を向ける。

「ありゃ？ 星伽？」

「咲木くん？」

そこには先ほど鈴音が張り紙で見た人物が驚きを顔に浮かべて小さな椅子に控えめに座っていた。

「よくきたなあー。咲木いー」

未だによく状況が掴めていない鈴音と白雪の二人に割って入るように力のない間延びした声が飛び込んでくる。その声の主である二十歳の女性は黒い革張りのイスで編み上げブーツの足を組んでぷはー、とタバコの煙を輪っか型に吹かしてだらしなく首を傾けていた。

二年B組担任、タキユラ尋問科の教員、つじつめい綴梅子。

はっきり言って鈴音が関わりたくない教員の上位に君臨する物騒極まりない奴である。

常に目が据わって、ぶっちゃけ端から見ると薬物中毒者みたいな人相なのだが、

(実際、綴が持っているあのタバコもキンジ曰わく、確実に違法モノらしい)

鈴音がこの万年五月病みたいな、無気力先生に関わりたくない理由はそこじゃない、もっと別の理由がある。

尋問。

その一点において綴は日本でも五本の指に入る卓越した尋問官だった。

何をされるか不明だが、綴の尋問を受けるとどんな口の堅い犯罪者でも洗いざらい何でも白状し、その後おかしくなって綴を女王とか女神とか呼ぶようになるらしい。

その噂を聞いたとき鈴音は最早尋問とかじゃなくて洗脳じゃねーか、  
という思いを禁じ得なかった。

まあー、とりあえず座れよう、と綴は隣の席にあつたイスを足で引  
つ掛けて鈴音の方に寄越し、座つたのを確認すると、

「えーと……………なに話してたっけ……………あれ?……………そうそう  
星伽の成績急うーに下がってるのはどうしてだあーだっけ」

聞いているこっちが疲れるような間延びした声で話して始める。

「別に、勉強はどあーでもいいーんだけどさあ……………なーに……………  
うーん……………あ、変化。変化は、気になるんだよね」

人にモノを教える先生としてあるまじき発言をしながら、綴は黒い  
薄手の革手袋を着けた手で、タバコを灰皿に押し付けた後、おかつ  
ぱ頭の黒々とした髪を揺らしてかぶりを振った。

「ねえー、単刀直入に聞くけどさア。星伽、ひよっとして           ア  
イツにコンタクトされた?」

アイツ? と鈴音はは頭に疑問符が浮かぶが、隣の白雪が深刻そう  
に目を伏せて答える。

「デュランダル  
魔剣、ですか」

フランスの宝具の名を示すソレは超能力を用いる武偵・『超偵』ばかりを狙う誘拐犯の名称だった。まあ現在、その件の誘拐犯は姿を見たものが誰もおらず、眉唾もの話だったりするのだが。

そして白雪は星伽神社を武装して守る武装巫女であり、卓越した鬼道術を使う『超能力者』だ。

つまり今回の魔剣のターゲットになる可能性がでたのだろうと鈴音は大ざっぱに推理するがここで疑問点が一つ。

どうして、ここに呼ばれたか。

確かに鈴音には『直死の魔眼』という破格の眼を持っているが、誰にもこの眼の事を話したことがなかったし、使ったとしてもせいぜい目の色が変わるくらいでその効果までは解らないはずだ。

なのに何故この話を聞かされているのか、鈴音には全く検討がつかなかった。

「それはありません。と言いますか……………もし仮に魔剣が実在した

としても、私なんかじゃなくてもっと大物の超偵を狙うでしょうし………」

そうやって思考を飛ばしていた鈴音の耳に白雪の自信なさげな声が入ってくる。

「星伽いーもつと自分に自信もちなよオ。アンタは武偵高<sup>ウチ</sup>の秘蔵っ子なんだぞー？」

「そ、そんな」

綴の誉め言葉にぱつっん前髪の下で恥ずかしそうに視線を下に落とす白雪。

「星伽い、何度も言ったけど、いいかげんボディーガードつけるってば。諜報科<sup>シヤホウ</sup>は魔剣がアンタを狙ってる可能性が高いってレポート出した。超能力捜査研究科（SSR）だってにたような予言をしたんだろ？」

「でも………ボディーガードは………その………」

「じゃじゃっ」

困ったように言い淀む白雪を横目に破った英和辞書らしい紙で妙な草をモゾモゾ巻いた綴は、べろ、とそれをツバで留める。

「私は、幼なじみの子の、身の回りのお世話をしたくて……誰かがいつもそばにいと、その……」

「星伽、教務科はアンタが心配なんだよお。もうすぐアドシールドだから、外部の人間もわんさか校内に入ってくる。その期間だけでも、誰か有能な武偵を　ボディーガードにつけな。これは命令だぞー」

「……でも、魔剣なんて、そもそも存在しない犯罪者で……」

「これは命令だぞー。大事なことから先生二度言いました。三度めはコワイぞー」

ぐずる星伽に綴は苛立ったのかおもむろにタバコに火を点け、プフウーッ。

と煙を白雪の顔面にぶっかけた。

なんかもう、完全に路地裏でカツアゲされるお嬢様とレディースの総長みたいな構図だった。

「けほ。は……はい。分かりました」

煙りに目を細めつつ、渋々白雪は首を縦に振る。

まあ、白雪の安全を考えるならしかたないよな、と鈴音は思いこれからボディガードされる煩わしさに少しだけ同情した。

しかし。

そこで何故か綴はこちらの方に視線を向けると、

「じゃーあ。決まりだなー。咲木いー、お前これから星伽のボディガードなー」

だらけた声の意味が分からなかった。

驚きに満ちた目でこちらを見てくる白雪を見てくる理由が全く理解できない。

ようやく彼の脳にその言葉の意味が浸透したとき、鈴音はあまりの事態に全身から真正直に鳥肌を発する。

「はあああああああああああああああああああああ!？」

ミサイルの発射よろしく、といった感じで勢い良く立ち上がったが

綴につつさいなあーと、普段の緩慢な動きからは信じられないくらいに鋭いローキックを臍にもらい、悶絶し涙目になりながらもイスに座り直す。

「~~~~ツツ!! .....す、すみません。質問してもよろしいでしょうか先生?」

「手短になあー」

「なんで、俺?」

鈴音がそう言うのも無理からぬことであった。

時々教務科からこういった任務が指名で依頼されることはある。その場合成功報酬に大幅な単位を貰い加えて試験が免除になったりするのだが、基本こういった任務は本当に優秀な奴にしかまわってこない。

鈴音の武偵のランクはSからEまでの六段階評価の内Cランク。所詮は平々凡々の実力しかもたない一般的な武偵高生徒だ。

実力と言えばもっと上には上がいるのだ。なのに何故わざわざ呼びつけてまでこんなモブキャラみたいな奴を護衛に回すのか? もっと適任がいるだろう。

そう思った思いを鈴音は目線に込めて綴に送る。

「あー？ 別にいい先生はトチ狂ってアンタを選んだわけじゃないしねえ。ちゃんとした理由があるのよ」

「いや、でも俺、探偵科ですよ？ 護衛みたいなものって強襲科の仕事でしょーよ。全くの畑ちがいも甚だしいツスよ先生」

往生際悪く足掻く鈴音に対して綴は唇の端でタバコを揺らしながらポリポリと頭を掻いた後に面倒くさそうに口を開く。

「咲木鈴音 探偵科所属。ランクはC。武偵としては並。特に苦手分野はなく何事もソツなくこなすが悪く言えば器用貧乏」

すらすらと綴の唇からでる個人情報に鈴音は絶句した。

……こんな詳しいパーソナルデータなんて一番尋問官に渡ってはいけないモノをなんで資料も見ずにこうも簡単に出てくるのだ？

背筋に氷を押し付けられたような感覚を感じる鈴音などお構いなしに綴は続ける。

「使用武器は腰にぶら下げた日本刀と、後ろ腰に差してある片刃の短刀のみ。珍しいいいー、今時銃使わない奴なんてめったにいないよねえ。なーにい？ 侍でも目指してんのオ？」

「別に目指してなんかいませんよ。ただちょっとした思い入れがコイツには有りました」

そう言つて右手で軽く刀の柄をなぞつていく鈴音に対して綴は興味のなさげな気のない相槌を打った。

「まあ、そんなのどーでもいいんだけど………というか今までの前はフリでこつからが本番………アンタ、過去に一件だけ解決事件コンピュータした事件、あるよねえ？」

ニンマリと童話に出てくるチエシヤ猫を彷彿とさせる笑みを浮かべた綴が発する言葉に鈴音は無意識のうちに下唇を少しだけ噛む。

蛇が鎌首をもたげるかのごとく鈴音の中から湧き出てくる苦々しい思いを無理やり押さえつけるように。

ソレは、咲木鈴音が経験した人生で、最初で最大の失敗談。

最高のハッピーエンドにして最低のバッドエンドを迎えた、未だに鈴音の心にシミのようにこびりついた後悔の物語。

「人気アイドル愛川みなみの護衛任務………何でも依頼主はクライアント大層ア  
ンタのことを誉めちぎってたらしいからねえ。星伽とも知らない顔  
じゃないし、これだけ高評価なら適任だろう？」

………だろう？、じゃねえよ、と鈴音は毒つく。

愛川みなみは言わずとしたトップアイドルの一人だ。腰まである長い艶やかな黒髪、陶器のような白い肌、クリクリとした大きな目で笑顔がとても可愛い、鈴音と同じ年齢の少女。

歌を出せば即ミリオン。テレビで見ない日はなく、ドラマ、映画、CMには引つ張りだこ。写真集は飛ぶように売れ、握手会には毎回長蛇の列が出来上がる。

歌を歌うマイクの代わりに刀を握り、香水を着けずに硝煙を漂わす鈴音とは真逆の人種。それが何の縁か分からないが、彼女と彼は出会った。

ボーイ・ミーツ・ガール。

本当にどっかの小説にでもありそうなアイドルとその護衛として。

もし、これが小説のお話だったら護衛される彼女は最初のうちは反発して嫌々ながら護衛である彼と共に行動するのだが、大きな危機に直面した時の危険を省みない彼の行動に惹かれ恋心を抱き、徐々に二人は惹かれあつく。そして事件を解決した後は幸せに暮らす、といった仕上がりになるのだろうか、残念ながら実際はそうそう上手くは行かない。

現実は厳しく、それでいてなんの救いもなかった。

恐らく鈴音はこの事件の真相を誰にも語りはしないだろう。キンジたちにも、そして愛川みなみにも。

ただただ心の中で一人、ろくでもない結末しか出せなかった自身を嘲笑う。

……………今でも時々テレビで天真爛漫な笑顔を振りまく彼女を見てある思いが浮かび上がってくる。

もしも鈴音とは違う誰かが彼女と出会っていたなら、あの彼女と彼女の家を取り巻く運命に打ち勝ちもつと違う終演を迎えていたんじゃないのかと、それだけは、どうしても考えざるを得ない。

だって咲木鈴音は。

愛川みなみの人生に対して。

どうしよもなく、取り返しのつかないことをしてしまったのだから。

罵倒されこそすれ、感謝される事はないのだ。だからこそ、こつこつ賞賛の声には慣れない。慣れてはいけないといつも思う。

「……………で、どオーすんの？」

「どーすんのも何も始めっから拒否権なんざねーんでしょ」

ぶーたれた顔で溜め息をつく鈴音に綴は当然と言わんばかりの意地の悪い笑みを浮かべる。

ホント、イイ性格してんぜ、と改めて教務科に来たことを後悔した鈴音だった。

「……………あーくそ」

小さく舌打ちしてから、しっかりと鈴音は背筋を真っ直ぐ伸ばす。

決めたからにはしっかりとけじめだけは付けなければ失礼だろう。

星伽白雪にも、愛川みなみにも。

そう思い、息を吸い込んで請け負うという覚悟を形として口から出そうとしたその言葉は、

「……………その依頼うけ」  
そのボディガード、あたしがやるわ！「ぎょべツ!?!」

天井から落ちてきたキンジとアリアによってなんとも情けないうめ

き声に変わって消え果てた。

なんというか、本当に最後が上手く決まらない男である。

一方、本場のラピユタよりも傍迷惑な登場の仕方をしたアリアは後から降りてきたキンジに一瞬せんべいみたいに潰れたが、ぼんつ、とキンジをはね除けると、

「き、きき、キンジ！　ヘンなとこにそのバカ面つけるんじゃないにゆえ！？」

リングゴみたいに怒鳴っていたのだが、そのセリフは最後まで言わせず途中で綴にキンジ共々、襟首を掴まれネコみたいに持ち上げられるかと思うとどこからそんな力が出てくるのかと思うぐらいに、ダンツ、と壁に向かって豪快に投げ捨てられた。

「おーい。生きてるかあー、咲木いー？」

「……………お陰様で鼻以外無事です」

大丈夫？　と赤くなった鼻をさすっている鈴音に優しく手を貸している白雪を横目で見ながら今さっき投げ捨てた二人の前にしゃがみこんだ綴は、

「なんだあ。こないだのハイジャックのカップルじゃん」

すーっ、とタバコを一気に吸い込み、薄ら笑いを浮かべて、斜め上を見つつ、こき、こき、と首を軽くならす。

端からみたら完全に凶悪犯罪者の仕草ソレそのものであった。

うあ、と綴以外の全員が絶句する。

詰まる所、超怖かった。

「これは神崎・H・アリア ガバメント（ガバ）の二丁拳銃に小太刀の二刀流。二つ名は『双剣双銃』<sup>カトラ</sup>。欧米で活躍したSランク武偵。でも アンタの手柄、書類上ではみんなロンドン武偵局が自分らの業績にしちゃったみたいだね。強調性が無いせいだ。マヌケえ」

綴はそんな周囲の空気をものともせず、アリアのツインテールの根本を片方つかんで顔を確かめながら、鼻で笑った。

「い、イタイわよつ。それにあたしはマヌケじゃない。貴族は自分の手柄を自慢しない。たとえそれを人が自分の手柄を自慢しない。たとえそれを人が自分の手柄だと吹聴していても、否定しないものなのっ！」

アリアは綴のアヤシさにも怯まず、犬歯むいて答えている。

「へー。損なご身分だねえ。アタシは平民で良かったあー」

アリアの答えに対して綴は心底どうでもよさそうな顔したがふとイコトを思い出した、と言いたげな笑顔を作り、

「そういえば欠点……そうそう、アンタ、およ……」

「わあ  
」！

アリアが急激に真っ赤になって、両手を頭の悪いニワトリのようにバタつかせつつ大声で綴の言葉をジャミングした。

「そそ、それは弱点じゃないわ！ 浮き輪があれば大丈夫だもんっ  
」！

本人は必死でフォローしたつもりだったのだろうが思いつきり弱点を晒しまくっていた。正に頭隠して尻隠さず。

コイツ実際は武偵向いてねえんじゃないのか、と思いがけずにアリアの欠点を発見して、どこぞの子悪党のごとく笑うキンジを見て鈴音は思っ。

「んで」

綴は慌てるアリアから手を離すとじろ、と未だにニヤニヤ笑ってる  
キンジの方を眺める。

「こちらは、遠山キンジくん」

「あー……俺は来たくなかったんですが、アリア（コイツ）が勝手に……」

「性格は非社交的。他人から距離を置く傾向あり」

しどろもどろに言い訳をするキンジをそっちのけで綴はペラペラと  
キンジのプロフィールを読み上げるように話していく。

「しかし、強襲科の生徒には遠山に一目置いている者も多く、  
潜在的には、ある種のカリスマ性を備えているものと思われる。解  
決事件は……たしか青海あおみのネコ探し、ANA六〇〇便のハイジャック  
ク……ねえ。なんでアンタ、やることの大きい小さいが極端なのさ」

「俺に聞かないでください」

「武装えいせいのは、違法改造のベレッタ（ベレ）M92F」

綴の正確な情報に一瞬、キンジは電流が走ったように体を震わせた。

「三点バーストどころかフルオートも可能な、通称・キンジモデル  
つてやつだよなあ」

「あー、いや……それはこの間ハイジャックで壊されました。今は  
米軍払い下げの安物で間に合わせてます。当然、合法の」

子悪党のようなではなく、子悪党そのものの引きつった笑顔でキン  
ジはごまかすが、

「へへえー。装備科アムトに改造イジンの予約いれてるだろ？」

「うわちっー！」

笑いながら怒るといふ器用な芸を披露してみせた綴の根性焼きによ  
つて見事にもみ消された。

「でえー？ どういう意味？ 『ボディガードをやる』ってのは」

黒いおかつぱ頭を向けた綴の前で、アリアは勢いよく立ち上る。

「言った通りよ。白雪のボディガード、二十四時間体制、あたしが無償で引き受けるわ！」

「お、おいアリア………！」

さながら台風のように散々大暴れして言いたい事だけ言うアリア。それを疲れた様子でキンジは止めようとするが、基本アリアに流されっぱなしなので対した効果は得られない。

「……いや、なんか知らないけど、もう咲木が護衛やる感じになってんだけど？」

黒いコートの裾をゆらして振り返った綴に、鈴音は、

「まあ、Sランク武偵が無償で馬車馬のごとく働いてくれんだったらこっちは楽だけど………どうする星伽？」

つつ、と鈴音は首を横にスライドさせて隣を伺うが、案の定、白雪は整った眉毛を釣り上げ一気にボルテージが上がる。

「い………いやです！ アリアがいつも一緒だなんて、汚らしい」

普通ならここまで言われたら引き下がるのだが、しかし残念ながら相手は自分の意見をこり押しするのに定評があるアリア。

白雪の剣幕に目を釣り上げながらおもむろにスカートから白銀のガバメントを取り出すと、キンジのこめかみに銃口を押し当てて一言。

「あたしにボディガードをさせないと、コイツ撃つわよ」

本来守るべき護衛対象に恐喝という暴挙に打って出た。

銃口を押し付けられた人質は武偵法九条！ 九条！ と両手を挙げつつおおわらわ。

き、キンちゃん！ と被害者（白雪）は両手を口に当てて突然の事態にフリーズ。

またか、と目の前で巻き起こる犯罪行為に武偵（鈴音）は興味をなくすとケータイを取り出し、パチパチ。

本来止めるべき立場の教師（綴）はふうーん……そおっという人間関係かぁー、と一人後ろの方でニヤニヤ。

そして犯人はしてやったり、といった様子で凶悪な笑顔。

そこはかたなくカオスな空間がここに誕生したのであった。

「じ、じよ、条件があります!」

しばらく悔しそうに唸っていた白雪は、両腕をぴんと真下し、涙目をぎゅーっと閉じてこっぴど叫んだ。

「キンちゃんも私の護衛して! 二十四時間体制で!」

教務科に響く、白雪の涙声。

「私も、私も、キンちゃんと一緒に暮らすうー!」  
そんな白雪の魂の絶叫(願望)をBGMにやっと終わったか、と疲労困憊の鈴音にニヤニヤ顔の綴がぼそりと、呟く。

「神崎がああ言ったし、お前も無料で決定なあー!」

「なんですとおおおおおお!?」

うっさい、と頭をど突かれた鈴音のタダ働きが決定した瞬間だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3123t/>

---

魔眼のリンネ!!

2011年7月24日09時42分発行